

# 現代住宅の平面構成に関する研究

第2報 平面類型化による典型4タイプ<sup>K1</sup>の出現傾向について

○正会員 岡 俊江<sup>K4</sup> 同 青木 正夫<sup>K1</sup> 同 竹下 輝和<sup>K2</sup> 同 友清 貴和<sup>K3</sup> 同 磯貝 道義<sup>K5</sup>  
同 宮崎 信行<sup>K4</sup> 同 河野 洋子<sup>K4</sup> 同 末広 香織<sup>K4</sup> 同 藤田 由美<sup>K4</sup>

## 1 はじめに

本報は、多様化しているといわれる現代住宅の平面構成の実態を明らかにし、その平面類型化を行なうことと、続き間座敷の存在といわゆる地方性との関連の有無について検証することを目的としている。

※1.2  
昨年度報告に引き続くもので、全国から収集したプランを類型化するにあたっては、昨年度報告した類型化方法を修正している。<sup>※3</sup>調査方法等については、8597大会<sup>※2</sup>規模と考慮していただきたい。

## 2 平面類型化の方法

現代住宅の平面類型化に関しては、近年、服部助教<sup>※3</sup>をはじめ、いくつかの方法が発表されている。本報で用いる類型化方法と既研究との相違点は歴史的な流れの中の発展段階として平面を捉えようとする点にある。即ち、近代中流住宅の史的考察による「中流住宅の平面は、大きくは、座敷系と茶の間系の2つの空間領域から構成されており、この2つの領域が重なり合い、融合して、家族生活空間を拡大する形で平面構成が変化してきた。」という知見をもとに、接客空間とだんらん空間の構成に着目して平面類型化を行なった。座敷とだんらん空間の分離・重合の状況によって、図2-1のモデル図に示すように、13タイプに分類した。更に、典型タイプを抽出して、ブロック別に全国的な傾向を考察した。(※図2-2を参照)

## 3 典型プランの抽出

座敷とだんらん空間が分離しているか重合しているかに注目して平面類型化すると、収集プランは13タイプに分類できた。

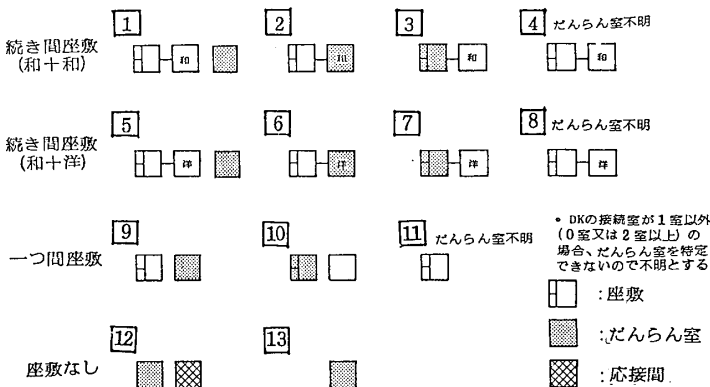


図2-1 平面類型モデル図

座敷のとりかたは住宅規模との関連の深いことと前記したが、平面類型化した13タイプについても、それぞれの分布する割合は、住宅規模との関連が深い。たとえ、座敷のあるプランの割合の高くなる延べ床面積70㎡台では、13タイプが種々にとられていて、分散している(図2-3)。しかし、面積が増加するに従って、続き間座敷の①、②、⑥と一つ間座敷の⑨の4タイプにまじり、100㎡台では、この4タイプの占める割合が90%を超えている。これに対して70㎡台では4タイプで47%である。住宅規模が増大するに伴って、この4タイプに集中する傾向がある。

この集中化の傾向は、ブロック別にみても全国的な傾向といえる。図2-4に示す70㎡台では、各ブロックにおいて、種々のタイプが出現して分散傾向にある。一方100㎡台では(図2-5)、A、D、Fを除

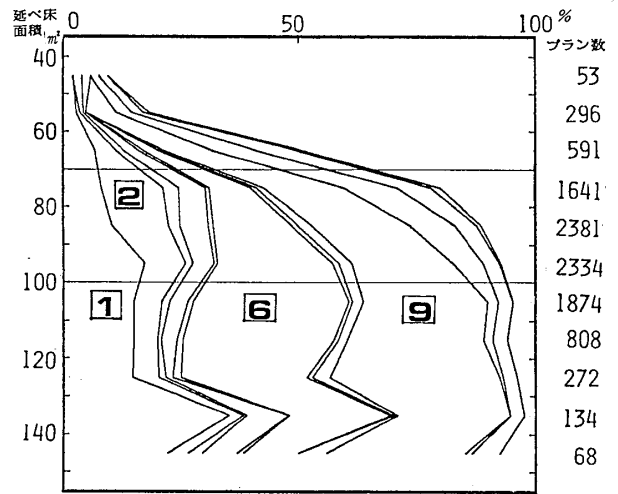


図2-3 延床面積と平面類型

座敷 床の間を備へた和室  
連続間座敷 座敷と、その隣の室が建具を含めて1間以上の開口で連続している  
応接間 玄関脇に設けられた洋室  
だんらん室 DK又はKに接続している室  
連続 2室が1間以上の開口で隣接している  
接続 2室が半間以上の開口で隣接している  
なお、DKは居室に含めない

注) ※2の連続間座敷と一つ間座敷の分布の割合は、座敷構成平均延べ床面積を考慮して右図(図2-2)に示すように157ブロックに分類した。沖縄は含まれていない。



図2-2 ブロックの構成

く12ブロックで、①, ②, ⑥, ⑨の4タイプが8割前後を占めている。又、A, D, Fブロックは、この4タイプのうちの更に1~2タイプに集中しているが、そのタイプの合計で、やはり8割をこえている。即ち、特定のタイプへの集中化の傾向が、全ブロックに共通して窺える。

小規模でタイプが分散する理由としては、室数との関連が考えられる。70㎡台と100㎡台の総室数は、70㎡台は4室以下が8割を占め、100㎡台は5室以上が9割をこえている(図2-6)。

室数の面から空間と住要求の対応を考える時、4室の場合に、接客室確保の要求と、日常生活の基本行為であるだんらんと夫婦、子供の就寝のための室確保の要求のすべてを満たすことはむずかしいので、接客と日常生活の葛藤が、70㎡台で様々なプランを生じさせていると考えられる。

これに対して、中大規模では、一定のプランに集中している。5室になると、前述の生活行為の要求は一応満たすことができ、接客空間確保に安定性が生じるようになる。その条件下で接客と日常生活行為の中の、何を、居住者が重視するか、住要求の違いによって、平面構成は異なってくるであろう。

たとえば、この4タイプは、座敷をもつという共通点がある一方で、座敷の形態は続き間と一ツ間の違いがあり、座敷とだんらん室との構成も分離と重合の違いがある。このように、平面構成原理の異なる4タイプ

にまとまっていく傾向は、居住者の住要求が整理されてきたと見ることができよう。

以上から、この4タイプを現代住宅の典型とみなすことができる(図2-7)。

#### 4 典型プラン4タイプのブロック別出現傾向

80~120㎡における典型4タイプの出現傾向は室数構成の違いによって、各タイプの出現率の差異が顕著である(図2-8)。前述のA, D, FとG, Jを除く10ブロックには共通点があり、②, ⑥, ⑨は1階2室型に多く、①は1階3室型が多い。即ち、座敷とだんらん室という核となる部屋の数と1階の室数が一致している場合が多い。特に①は実数としては⑥, ⑨に次ぐ存在であるが、1階3室である場合には①である割合が高いので、1階に3室設けられる規模であれば、①のプランが設けられる割合が高いと見ることができる。また、②は2-2室型に多いが、これは、②が90㎡未満の比較的小規模な住宅に多いことと合致している。⑥と⑨が2-3室型で最も多いことも含めて、①, ②, ⑥, ⑨の出現傾向は、10ブロックに共通しており、全国的なものといえよう。

この全国的な傾向と異なるA, D, F, G, Jの5ブロックについて以下、考察する。

Aブロック即ち北海道は、和・洋2室の続き間座敷である⑥の比率が高く、8割を占めている。延べ床面積や1-2階の室数構成にかかわらず、1階2室型でも3室型でも⑥の1タイプに集中している。北海道

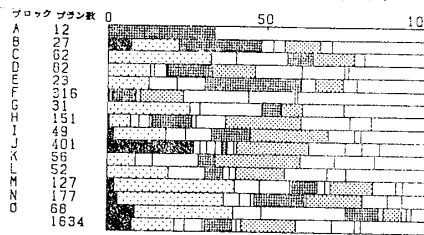


図2-4 70㎡台ブロック別平面類型

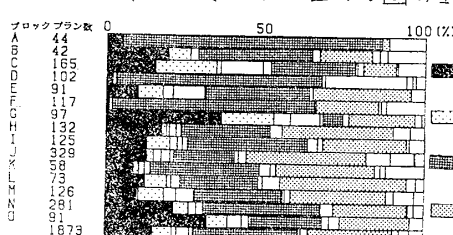


図2-5 100㎡台ブロック別平面類型

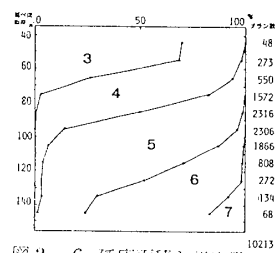


図2-6 延床面積と総室数

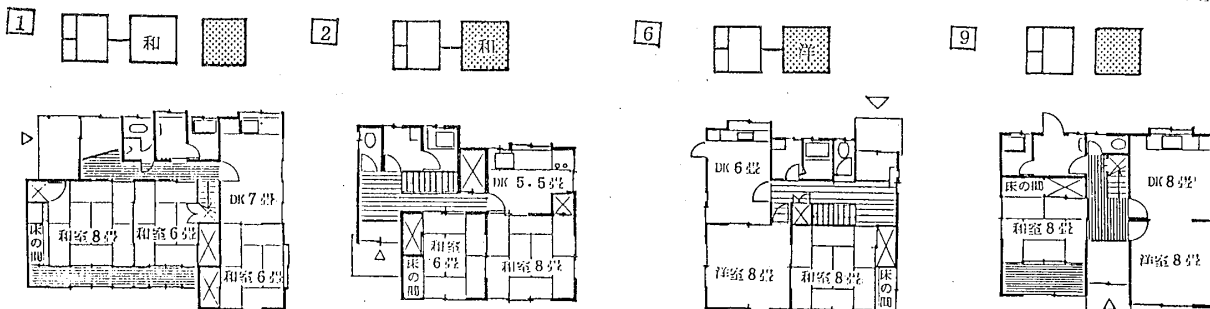


図2-7 典型4タイプのモデル図と実例プラン

に多いこの⑥のプランはいわゆる居間中心型で、座敷へのアクセスが居間即ち次の間を經由しており(次の間入り)、座敷直入りでない点が他県の⑥の続き間座敷と異なっている。しかし、⑥は平面構成の点では、和・洋2室の続き間座敷とみなせるものなので、座敷のあるプランの占める割合は、他県と大差ないといえる(図2-9)。

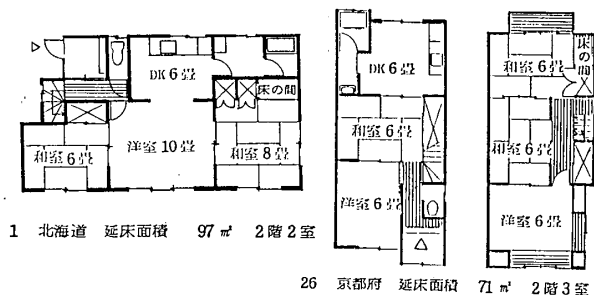
J、即ち京都、大阪、兵庫、奈良の関西の4府県は、町家に多く見られる2階の続き間座敷と一つ間座敷が現在も多い。このために、①は1階に設けた場合は1階に3室以上必要とするが、Jでは2階に①のプランを設けているために1階2室あるいは1室の場合にもこのプランが見られる。同様に、⑨のプランについても2-2室型で2階の一つ間座敷が多く見られる。し

かし、2階の座敷5、続き間一つ間とも180㎡未満の小規模住宅に多く、100㎡を超えると、1階に座敷を設ける割合の方が高くなり、他県と同様の傾向を示すことは注目されよう(図2-10)。

D、F即ち茨城、栃木、埼玉、千葉、東京、神奈川の6県は、⑥と⑨の占める割合が高く、和室2室の続き間座敷の①と②の少ないことが特徴である。1階2室型の②のタイプはDにおいてわざわざ見られるが、1階3室を必要とする①は皆無に近い。この地域の敷地条件がきびしく、1階に3室確保することが困難であることも一つの要因であろう。しかし又、千葉、神奈川などで、敷地条件に恵まれていても1階を3室型とせず、座敷の他に広いリビングルームを設けて⑥又は⑨のタイプの2室型とした例が見受けられた。

G即ち富山、石川、福井の3県は、続き間座敷は多く、しかも和室2室型の①と②が多くて、和・洋2室型の⑥の特に少ない点が他県と異なっている。①の多く見られることは、1階3室型の多いこと、つまり、このブロックが全国で最も延べ床面積の大きくて、1階に3室とることのできる大規模住宅の多い地域であることと関連があろう。

D、FとGとでは、同じ続き間座敷であっても、①



1 北海道 延床面積 97㎡ 2階2室

26 京都府 延床面積 71㎡ 2階3室

図2-9

図2-10

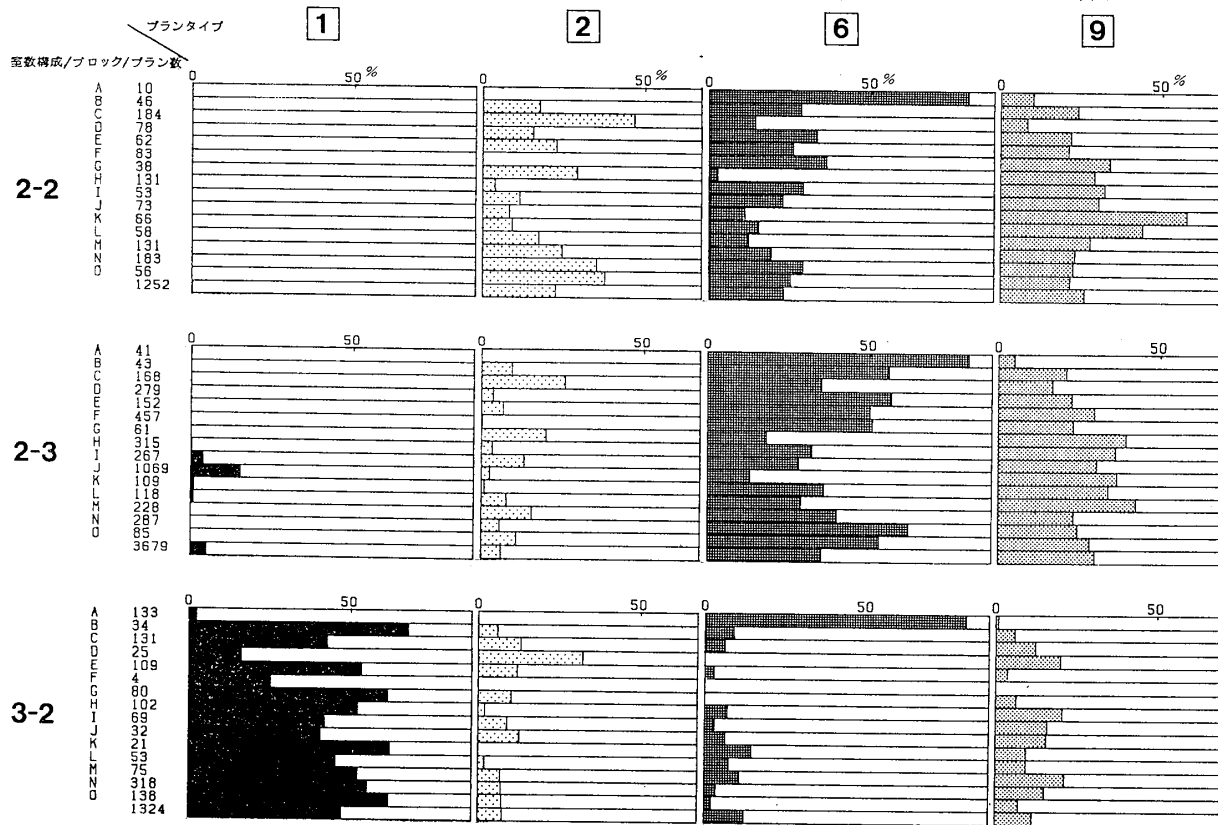


図2-8 室数構成別ブロック別典型4タイプの出現率

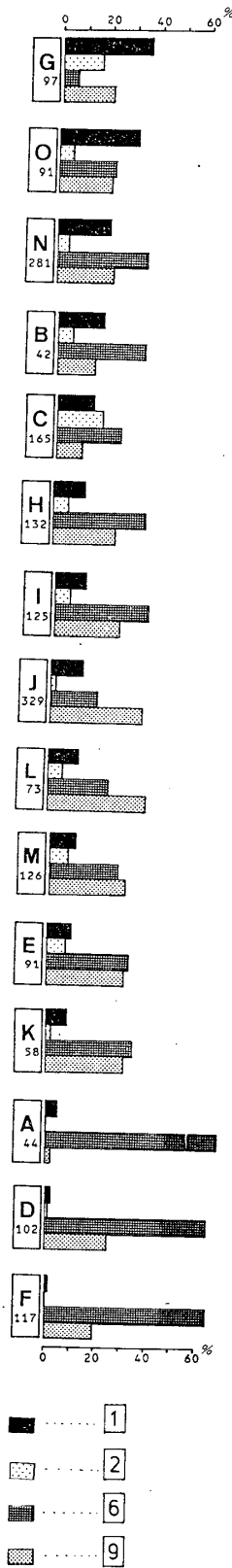


図2-11

典型4タイプの  
ブロック別出現傾向

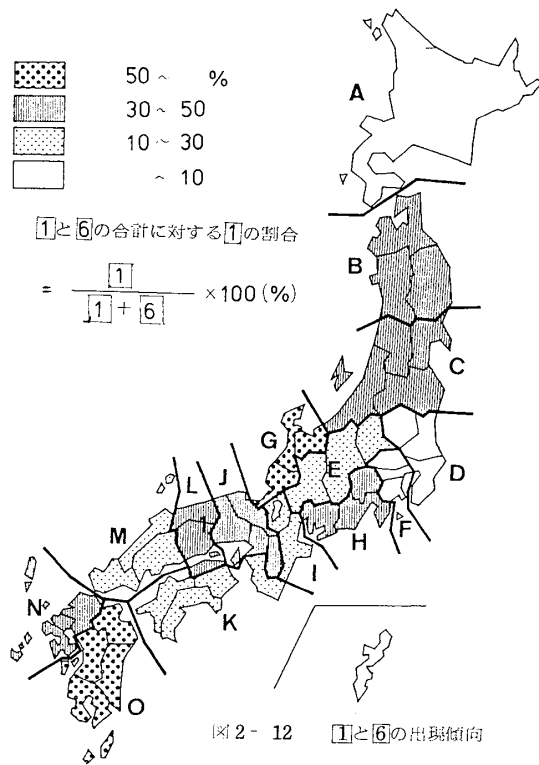


図2-12 ①と⑥の出現傾向

と⑥の出現率が対照的である。この両者の違いは、一つには上述したように、立地条件の差異によるものが考えられる。一方で、同じように敷地条件に恵まれた場合にも、①と⑥にわかれている状況は、居住者の住まい方、嗜好の差異を反映していると考えられる。

5 同一規模のプランにおける4タイプの出現傾向

①と⑥の平面構成を比較すると、①は座敷とたんらん空間が分離した構成、⑥は座敷とたんらん室が重合している。この両者は、近代中流住宅の史的考察の成果を踏まえると、①から⑥へと変化しているととらえることができる。そこで、①と⑥に注目して、典型4タイプの各ブロックの出現傾向をみると、5室以上のプランが9割以上を占めて、接客室確保の面では一応の安定

性をもっている100㎡台では、図2-11のように表わされる。①が減少して、⑥が増加していくという一つの大きな流れを見ることができる。前章において、異なった傾向を示すと見られたA, D, F, Gの4ブロックも、この大きな流れの両端に位置づけられて、全体として、共通の方向にむかっていることが予想される。

次に、①と⑥の比率に注目して分類すると、各ブロックは、図2-12に示すように、更に大きくまとめることができ、プランの出現傾向の共通性を見ることができる。なお、H, J, Lの3ブロックは、B, C, Nに近い比率になっているが、⑨の占める割合が高いので、4タイプ

7の出現傾向は、後者とは異なっていて、全体の流れからも、少しはずれている。この違いの検討は今後の課題としたい。

6 むすび

座敷とたんらん空間の構成に着目して平面類型化すると典型プラン4タイプに集約できる。その出現傾向は、全国的に共通しており、歴史的な流れの中では、共通の方向にむかっているといえることができる。即ち、敷地面積から規定される住宅規模の大小と1-2階の室数構成の差異によって、4タイプの分布の割合が決める傾向がある。

これと異なるA, D, F, G, Jの5ブロックのうちJを除く4ブロックは、典型4タイプの出現傾向において、全体の流れの中に位置づけることができた。Jも又、延べ床面積100㎡をこえると全国的な傾向と同様になる。即ち、いずれのブロックも、地方性として説明される傾向は見られない。

更に、立地条件の他に居住者の住まい方・嗜好も4タイプの出現傾向に影響を与えると考えられるので、今後、典型4タイプに対する居住者の嗜好調査・住まい方調査を通じて、接客空間に対する要求構造を明らかにし、現在における続き間座敷の存在基盤を解明したい。

※1. 現代住宅の平面構成に関する研究 第1報 青木研 九州支部報告集 1984年  
 ※2. 現代住宅の平面構成に関する研究 第1報 青木研 大会報告集 1984年  
 ※3. 住居要求から見た独立住宅の類型化に関する研究 服部研 住宅建築研究 1977年  
 ※4. 中流住宅の平面構成に関する研究 青木研 住宅建築研究 1983年

\*1 九大教授・工博 \*2 同講師 \*3 同助手・工博 \*4 同大学院生 \*5 ISA設計工房